

特別記事

連載スピンオフweb企画 開催レポート

難しい症例から理学療法を考える一誌面には書きにくい悩みの本音

本誌連載「難しい症例のみかた」(2023年7～12月)を題材にしたセミナーが、2024年3月18日(月)18:30からオンラインにて開催されました。

冒頭で、本連載の企画担当者でもあった司会の内山靖先生(名古屋大学)より企画趣旨が紹介されました。本連載のテーマ「難しい」とは「困っている」ことだと言い換えて、誰が困っているのか、何に困っているのかを解きほぐすことで、症例に対して「難しい」と感じる理由を探り、その解決の道しるべになればとの思いが述べられました。

その後、連載論文として掲載した4症例について、執筆者自身が話題提供者として思いを紹介した後、参加者からの質問や意見をもとに、皆で意見交換を行いました。取り上げられた症例に類似したケースを担当するにあたっての心がけや実施すべきだった評価といった臨床的なテーマから、他職種との連携、後輩理学療法士へのかかわり方など、広範な視点から多くの意見交換がなされました。

本セミナーは、学術発表や論文としての症例報告の知見があるながらも、正面からは共有されにくい「難しさ」の思いを共有することに主眼があります。これにより、誰しも日々悩みながら臨床に向き合っていることが伝わり、勇気づけられたと、参加者から感想があ



総合討論では、話題提供者の尾川達也先生(西大和リハビリテーション病院、中段左)、田村由馬先生・高橋もも先生(獨協医科大学日光医療センター、上段右)、中谷知生先生(宝塚リハビリテーション病院、下段左)、葉清規先生(浜脇整形外科、中段右)に、連載執筆者、本誌編集同人の先生を交えて議論した。

りました。また、そうした「難しさ」にどう向き合うかのヒントも得られたとの声も挙がりました。

話題提供された論文は、すでに専門性の高い中堅から指導的な立場にある執筆者の方によるものが多く、積極的な意見交換には同様の経験や水準の参加者が目立ちました。一部で躊躇があったであろうと思われる一方で、先輩たちも悩みが尽きない現実を目の当たりにして、いろいろと考える機会になったという若手からの感想も寄せられました。

日常の臨床での悩みや不安は尽きないものですが、こうした「難しさ」を皆さんも同僚や周囲の理学療法士と共有、議論してみてもいかがでしょうか。

＊

本誌は2024年で58巻を数えます。これまで座談会の公開収録

をしたことはあったものの、広く読者の参加を募ったセミナーは初めての試みでした。本セミナーのように症例をテーマとしたいいわゆる症例検討は全国規模の学会や各職場でも実施されていますが、今回、202人の読者からの申し込みがあり、本誌が企画・運営する役割もあることをひしひしと感じています。論文の投稿先、最新トピックスの情報収集の場とともに、意見交換や日々の悩みを共有できる雑誌にもなれるように努めてまいります。

掲載記事に対するご意見・ご感想のほか、もっと深めたいテーマや意見交換したいトピックスなど、お気軽にお寄せいただければ幸いです(→849頁「読者の声募集」もご参照ください)。

(本誌編集室)